

学力調査の状況
国算ともに、平均正答率はほぼ全国平均並であった。無回答率は全国平均と比べ低くはないが、「児童質問紙」で「今回の算数の問題では、言葉や数、式を使って、わけや求め方などを書く問題があった。それらの問題について、どのように解答しましたか。」という質問に、「解答しなかったり、解答を書くことを途中であきらめたりした。」と回答した児童が、全体の4分の1程度に上った。このことは、問題に試行錯誤しながら粘り強く取り組み力が不足していたり、時間配分に課題があったりする児童が一定数見られることを物語っている。算数では、「B 図形」「D データの活用」については全国平均を下回る結果となった。図形を構成する要素に着目して答えたり、グラフや表を読み取ったりして答えを導き出すことが不得手であるという実態がうかがえる。国語では、特に自分の考えを文章でまとめる記述形式の問題での誤答や無回答の割合が高く、自分の考えを文章で表現することを苦手としている実態が見られる。

見えてきた課題
「算数の勉強は好きですか」「算数の授業の内容はよくわかりますか」という質問で、「はい」と肯定的に答えた児童が全国平均を7パーセント以上上回った。算数に対する苦手意識は薄く、学習を前向きに捉えている実態が垣間見える。一方、上記に記したように不得手とする領域も顕著なことから、様々なパターンの問題に触れさせたり、1つの問題を多面的な解き方で考えさせたりする時間が必要になると考える。「算数は好きだし、よくわかる」という児童の意欲を更に高められるよう、特に図形領域では可能な範囲で具体物を使い、実際に手を動かして実感を伴った理解につなげたい。「国語の勉強は大切だと思いますか。」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。」という質問で「はい」と肯定的に答えた児童がどちらも9割を超えていた。一方で「国語の勉強は好きですか。」という質問では「はい」と答えた児童は6割と減少していた。特に「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てを工夫している。」という質問では約半数の児童が否定的な回答をしていた。学力調査の実態からも自分の考えを文章でまとめる記述形式の問題での誤答や無回答の割合が高い、自分の考えを文章でまとめる問題では、いくつかの条件を満たして文章にまとめることが求められたが、すべての条件を満たしてかいた児童は3割にとどまり、4割の児童が条件を満たしていなかった。自分の考えをまとめるときに、いくつかの条件を提示して文章にまとめたり、文章を読んでどのような視点で文章が書かれているかを読み取る学習が必要になると考える。並行して、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着に向けて、反復学習や少人数指導等の充実、夏休みの補習等の取組も継続して行っていく。

授業をデザインする8つの取組について	
見通しをもたせる導入	児童の興味・関心が高まるように課題の提示を工夫する。児童が「やってみたい」「知りたい」と未知の事柄を探究したくなるような導入を意識して行っていく。
価値ある対話の共有	一人一人がしっかりと考えをもった上で、それらの考えを広げるために、比較・検討・分類・統合・関連付けを行い、価値ある対話を増やしていく。
ICT機器の活用	児童がICT機器を効果的に活用し、仲間と協働し、新たな学びを創造する授業を展開することで、課題に対し主体的・対話的に学習できるようにする。

各教科における課題を改善するための指導の重点				
	年度当初に設定した重点	低学年	中学年	高学年
国語科	基礎学力とともに活用する力も高める。全ての教科学習の土台となる言語能力を高めるために、言語能力を支える語彙を豊かにする指導を充実させる。また、単元の中でペアやグループで対話する場面を設定し、主体的に対話的な学びの実現を図る。発達段階に応じた「考えの形成」を大切にして、児童が自分で思考し、判断し、表現する場面を設ける。	言語能力向上のために、語彙が豊かになるような活動を行う。他教科と関連しながらペアやグループで対話する場面を増やし、全体での発表につなげる。考えの形成においては1年生で基礎基本を学び、2年生ではメモを活用しながら伝えられるように学習を進める。	言語能力向上のために、教科書の言葉の宝箱を活用する。総合的な学習の時間や社会科等でも、積極的に辞書を引かせている。学級文庫の充実を図り読みかけの本を手元に置かせ、読書活動を推進している。対話的な学びに向けて、ペアやグループ活動を増やし、教師はファシリテーターに徹する。ジャムボードを積極的に活用し、対話的な学習を促す。	言語能力向上のために、同音異義語、慣用表現、四字熟語などの扱いを自主学習等を活用し、語彙についての興味関心を高められるようにしていく。根拠と意見を区別して自分の考えを形成していけるように指導を続けていく。
社会科	導入の資料提示を工夫し、児童の関心を高め、途中で出た問いを中心に学習問題を作り、追求・解決する活動に取り組んでいく。導入で児童課題意識を高めながら、学習計画を立てることで課題解決の段階にスムーズに展開していく。 また、学習形態も工夫する。話し合い活動を多く取り込み、児童が主体的に考えたり選択・判断したりして表現する学習活動を重視しながら、児童の思考力・判断力・表現力を伸ばしていく。	(中学年からスタートに向けて現時点で意識する指導の重点)体験活動を多く行い、体験後にさらに調べたいことや紹介したい意欲につながるよう学習展開を工夫する。	動画や、パンフレットなどを活用したり、体験的な活動を通して学習を進めたりしていく。また、社会科の見方・考え方を働かせながら、外部人材を積極的に活用し児童にとって学習を身近に感じさせ、生活と結び付けて考えさせることで児童の思考力・判断力・表現力を伸ばしていく。	資料提示を工夫し、児童の興味関心を高められるように指導している。児童も課題意識をもって学習に取り組んでいる。資料を元に考えたことを交流する際には、積極的に取り組んでいる。課題として基礎的・基本的な知識の確実な習得がある。単元終わりのプレテスト、ナビマ等を活用し、知識の確実な定着を図る。
算数科	単元別で理解度に応じた学習集団を編成し、補充的な学習や発展的な学習を取り入れながら、習熟度別授業をさらに充実させる。東京ベシックドリル診断テスト、各単元末に行うテストで個々のつまずきを把握し、授業計画の中に、定期的な復習の時間を設ける。月1回の全校テストの取り組み、夏季休業中の補習、モジュールでの学習を通して、基礎学力の向上を徹底的に図っていく。	基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図る。問題場面の想起や活動の見通しをもたせるために、単元計画・導入の工夫をした授業展開を考える。また、教材教具を工夫し興味関心を高め、具体物の操作などの体験活動を増やして、できる限り日常生活とのつながりを意識させていく。	単元ごとに理解度に応じた学習集団を編成し、補充的な学習や発展的な学習を取り入れながら、習熟度別授業を充実させる。教材の準備等を計画的に行っている。全校テストに向けての学習を充実させて全体の底上げを行う。ナビマを活用したり、形成プリントを活用したりしながら、個々のつまずきを把握し、個別最適化学習を推進していく。	現学年で学習する内容に関連する既習事項を全校テストで復習することで、現学年での学習を支援できるようにした。「数学の見方・考え方」を、確実に身に付け、それらを活用して思考力・判断力・表現力を伸ばせるよう、ペア・グループ活動等の対話的活動を取り入れた指導など行う。

⑮授業改善推進プラン

理科	「事象提示－問題設定－予想－実験・観察－結果－考察－まとめ」の学習スタイルを共通実践する。児童一人一人に観察や実験の結果を予想させ、観察や実験の計画を立てさせたり、方法を考えさせたりする。観察や実験の結果と予想を比較させ、児童が自分の考えを見直したり、観察や実験の方法を工夫したりする活動を位置づける。	(中学年からスタートに向けて現時点で意識する指導の重点)「予想－観察・体験－結果－気付き」などの学習スタイルを実践して理科につながるようにする。児童が主体性をもって疑問をもちながら学習に向かい、どのように解決していくかを意識した授業展開を行う。	「事象提示－問題設定－予想－実験・観察－結果－考察－結論」の学習スタイルが定着してきており、児童が主体的に学習に取り組んでいる。実験や観察などの主体的で体験的な活動を行い、考察の仕方を学び言語化させることで児童の思考力・判断力・表現力を伸ばす。観察においてはICT機器を適切に活用しながら、理解を深めさせる。	学習のスタイルを共通実践し、体験的に学べるよう指導計画、展開を行なっている。実験の結果から考察する過程で自分の考えがまとまらない児童がいる。自分の言葉でまとめていく経験をさせていく必要がある。また、結論から得た知識技能の定着が課題である。単元終わりのプレテスト、ナビマ等を活用していく。
生活科	適切な目標設定をして、本時の初めに児童と確認して、目的意識を明確にもった活動になるようにする。動植物と触れ合ったり、町探検を通して地域のことを知ったりするなど、実物と向き合う場をより多く設定する。調べたことを模造紙にまとめたり、発表したりするなど、体験活動と表現活動の一体化を図る	体験活動を通して、地域や仕事への興味を高め、児童の気付きを大切にしたい授業を計画する。体験活動後に「もっと調べたい」という意欲を高められるように指導し、社会科につながるようにする。動植物など自然に触れる機会を多く設ける。日々の言葉がけにより、日常生活で抱いた疑問を自力で解決しようとする態度を育てる。観察では「比べる・変化に目を向ける」視点を意識した指導を行う。		
音楽科	児童が音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成するために、多様な音楽活動を幅広く体験し、児童一人一人の個性や興味・関心を生かした楽しい音楽活動を目指す。また、ペアやグループ活動を取り入れることで、他者と協働しながら、基礎的な表現・鑑賞の能力を伸ばしていく。	音楽的な見方・考え方を働かせ、日常生活の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成を図る。教材・教具を工夫し、合わせて歌ったり楽器を用いて演奏したりなど、子供たち自身の活動を多く取り入れながら、基礎的な知識・技能の能力を育てる。また、児童一人一人の個性や興味・関心を生かし、体を動かしながら楽しい音楽活動を行うようにする。	多様な音楽活動を体験し、音楽的な見方・考え方ができるように様々な教材や楽器と触れ合う場を設ける。自分の考えや感じたことを言葉や音で表現できるよう、ペアやグループなどの対話やワークシートを用いた活動を行う。また、曲の理解を通して自身の演奏に思いや意図をもって表現を思考し、楽しみながら音楽活動を行うようにする。	音楽的な見方・考え方を働かせ、他者と協働しながら作品を作り上げる楽しさを実感できる場を設ける。活動の中でワークシートを活用しながら意見交換を行い、対話的な活動の場を多くもたせることで、音楽表現を生み出したり考えの幅を広げたりする。ICTでは録音や録画を通して自身の演奏を客観的に捉え、変化を感じながら技術を高められるような活動を行うようにする。
図工科	絵、立体、工作ともにさまざまな素材や題材を扱うことにより児童の経験を増やし、表現の幅を広げる。話し合いながら活動したり、見合ったりすることで、つくりだす喜びを味わいながら、多様な発想をもてるようにしたり、技能向上の場としたりする。諸外国の文化や、作家の作品、児童相互の鑑賞や、発表を取り入れた協同的な学習活動を多く取り入れる。美術館や他の施設、外部講師等との連携や、新しい表現や鑑賞を深めるツールとしてICT機器の活用を図り、造形的な見方・考え方を広げていく。	様々な素材に触れたり、見たり、体験したり、道具の使い方を知ったり、友達の表現と関わったりする中で感性を育められるようにし、基礎的・基本的な技能を高めながら、表現の楽しさを実感できるようにしていく。造形遊びや作品づくりを通して成功体験や達成感を味わったり、掲示した作品を見合うことで自信を付けたり、自分や友達のよさを実感したりできるように授業を組み立てる。	多様な素材や題材、彫刻刀やのこぎり等の新しい用具との出会いを通して、安全に気を付けながら繰り返し活動することで基礎的・基本的な技能を高めながら、意欲的に表現できるようにする。SDGsにも配慮し、造形活動を通して廃材を活用したり、多様な表現や文化を認め合ったりできるようにする。友達の作品を見合ったり、発表し合ったりして様々な表現に触れる中で自分のイメージを深め、思いをもちながら表現の幅が広がれるようにしていく。	これまで扱ってきた技法や用具を活用しながら、自分の思いにに合わせて表現方法を追求していけるような題材を設定する。ICTを活用した制作や様々な芸術作品や伝統的な造形の鑑賞の機会を設け、新しい視点で表現に向かえるようにする。キャリア教育との関連を考慮しながら美術館や関連施設との連携や著名な作品等について取り扱い、鑑賞の目を養ったり視野を広げさせたりしながら表現活動への関心を継続させていくとともに、中学に向けた接続や生涯にわたって造形活動を生かせるように伝えていく。
家庭科	基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図ると共に、児童同士で協働したり、意見を共有して互いの考えを深めたりするなど、自らの考えを広げ深める学びの場を設ける。持続可能な社会に目を向けられるよう、リサイクルやアップサイクルについての知識を深めたり作品づくりを行ったりすることを通して、SDGsを自分事として捉えられるようにする。			ミシンを使った学習では、児童同士で教え合いながら協同的に学習を進めていた。調理実習は行えなかったため、視聴覚資料を使ったり、調理器具を使って模擬実習をしたりしながら技能向上を目指すことができた。
体育科	先行研究を基に、体力の向上を図るために学校の教育活動全体で系統的な体育・健康教育の授業及び指導、体育的活動を実践するとともに日常的に親しむ環境づくりを進め、家庭と連携しながら学校教育活動全体として効果的に取り組んでいく。発達段階に合わせて動きや技能を身に付ける一単位時間の流れを明確に示すとともに、児童が運動の楽しさやこつを「共有」するための発問・言葉かけを工夫した授業モデルを提案し、実践していく。	遊びを通して必要な技能を経験できるように工夫している。基本的な授業の流れ、学習カードを通した自分の振り返りを徐々に身に付けている。見つけた運動のポイントを共有し、友達のよさや楽しむことの良さを感じることができるようになっている。	単元を通して、一単位時間の授業の流れを定めることにより、児童が見通しをもって主体的に活動できるようにする。児童が見つけたこつなどをシェアリングする時間を設定し、運動の楽しさやこつを共有したり、ICTを活用して自己分析したりすることができた。課題として、高学年になると、技能差が見られる。苦手な児童への手立てとして、ルールや場の工夫が必要である。	ワークシートを用いたことで、一単位時間の流れ・単元全体の流れを明確にして学習に取り組むことができた。児童が見つけたこつなどをシェアリングする時間を設定し、運動の楽しさやこつを共有したり、ICTを活用して自己分析したりすることができた。課題として、高学年になると、技能差が見られる。苦手な児童への手立てとして、ルールや場の工夫が必要である。
英語	教科書の内容を柱にし、児童の身近なものや興味関心のあるものを盛り込んで教えていく。英文法は教え込むのではなく、ゲーム			教科書の内容を柱にし、児童の身近なものや興味関心のあるものを取り入れ、指導している。児童が将来使えるコミュニケーション

⑮授業改善推進プラン

外国語科	やアクティビティを通して自然と身に付くよう指導する。インプットした情報をアウトプットする時間を十分に確保する。コミュニケーション能力の素地の育成を目指し、授業を展開していく。			ンの素地の育成を目指し、コミュニケーション活動を毎時間取り入れ、授業を展開していく。
総合的な学習の時間	課題設定をする際に、児童の興味関心の幅が広がるような資料を提示し、調べ学習への意欲を高める。体験的な活動やゲストティーチャーの話などを取り入れ、課題解決への意欲を高めていく。また、課題解決の方法や調べたことをまとめる手段を数多く身に付けさせ、課題に合った方法や手段を選んで学習をすすめられるよう指導する。		児童が自ら調べたいと思えるような資料を提示することで、児童の興味関心を高める。体験的な活動やゲストティーチャーの話などを取り入れる機会を設け、児童に具体的なイメージをもたせることで、学習課題をより自分事としてとらえられようにする。また、本やクロムブックなどを活用し、必要な情報を収集する能力を身に付けさせ、すすんで探究活動を行うことができるよう指導する。	導入では、児童が興味関心をもてるよう、ICTを活用し、資料を提示して、みんなが基礎的な知識を確認し、今わかる課題について考えてから、一人一人がテーマ設定をできるようにした。また、児童がスライド等を用いてまとめる経験をさせ、学んだことを他者に伝えられるように工夫した。今後、ゲストティーチャーや体験的な活動をより取り入れていきたい。
特別の教科 道徳	週一回の道徳の時間を要とし、年間指導計画をもとに授業を行うとともに、学校の教育活動全体を通じて道徳教育を行う。また、校内の教員に向けた道徳研修を実施し、指導力向上に務めることで、児童の豊かな心を育んでいく。 さらに、年に一度の道徳授業地区公開講座で、全校が道徳授業を公開したり、高学年児童と保護者を対象としたシンポジウムを行ったりすることで、保護者や地域の方にも啓発できるようにする。	年間指導計画に基づき、計画的に授業を行っていく。授業では、分かりやすい発問の工夫をしたり、役割演技や動作を通してねらいに近づけたりする工夫をしている。今後も教材提示や授業展開について学年間で共有したり、授業後に児童の反応を伝え合ったりしながら指導力の向上に努め、児童の豊かな心を養う。	年間指導計画に基づき、価値項目に応じた授業展開を意識し、週に1時間の授業を行う。また、アンケートを実施したり、キャリアの視点を提示したりしながら、自分事としての意識を高めていく。1単位時間の授業の中で教材提示を工夫するとともに、児童が自分事として考えることができるよう発問やワークシートを工夫する。同時に教育活動全体を通して道徳教育を進めていく。さらに、年に一度の道徳授業地区公開講座で道徳の授業を公開することで、保護者の方や地域の方にも道徳教育への関心を高めてもらえるようにする。	学校行事と関連させて年間指導計画が作られているので、児童の実態や学校行事のタイミングに合った指導を行うことができていく。毎週の道徳の時間には、児童の実態に応じて発問を変えたり、場面絵などを用意したりするなど、工夫して授業を行うことができていく。また、道徳ファイルを使うことで、自己の変容に気付いたり、学びを振り返ったりすることができている。シンポジウムでは、代表児童だけでなく、話を聞いていた児童や保護者も発言でき、全体で話し合い考えを深めることができた。
特別活動	自発的自治的な集団活動を通して、思いやりがあり、奉仕的な生活態度をもち、将来を見通してより良い共同生活を築く、自主的実践的な児童を育てる。	異学年交流を通して上学年の姿を見ながら学校のために行動する良さを感じることができるようになっている。当番活動・係活動では責任をもって取り組むことや、互いを認め合う雰囲気大切にすることで自主的に行動してみようと思う気持ちを高める。	異学年集団での関わりを通して、思いやり的心をもつて活動することができている。学級活動では、学年、学級の活動をもとに、集団の一員としての自覚を深めるとともに、健全な心身の発達や生活態度の向上を目指し指導していく。また、南一フェスティバル等の学校行事や教育活動全般を通して、互いの良さを認め合ったり発揮し合ったりできるよう、交流の場面を設定していく。	係活動では、学級をよりよくするために自主的に行うことができていく。南一フェスティバルや縦割り班活動では、他学年の児童にに対して考え、思いやりの心をもつて活動することができている。今後、自身の学習や生活の目標の振り返りの時間の確保をしていく。
外国語活動	ゲームやアクティビティを工夫し、児童の興味関心を引く授業展開をしていく。児童の身近なものを取り入れることで、英語を使ってみようという気持ちを高め、実際に体験させる場面を増やす。		他教科、異文化理解などの内容を取り入れ、児童の興味関心を高められるように指導している。身近な内容を英語で学習することで、英語を使ってみようとする気持ちを育めるようにしている。	